
バカとテストと転校生！

ゆき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと転校生！

【NZコード】

N3516Y

【作者名】

ゆき

【あらすじ】

風間 勇斗は『試験召喚システム』を取り入れた進学校、『文月学園』に興味を持ち 家族のこともいやになつたので周囲の意見を無視して転校を果たす、疲れがたまつてたのか居眠りでFクラス入りを果たす。そこでかつての友達、観察処分者の吉井明久と学年2位の才女、姫路瑞希と再会し元神童、坂本雄一や帰国子女、島田美波 それに木下秀吉やFクラスのバカと関係を持つことになる

主人公紹介

オリキヤラ紹介

風間 勇斗 17歳

身長 170cm 体重 60kg

特技 剣術 脱走術 料理 弓道

趣味 昼寝 悪巧み 料理 読書 裁縫おもにぬいぐるみとか

得意教科 物理 数学 英語 世界史 現国

苦手教科 日本史 保健体育

容姿 白髪短髪。体系は普通

おとなしそうな顔つきで、勉強や読書に勤しむときは眼鏡を掛ける。

異性にまったく興味がなく、そのため男のロマン（H日本）にも興味はない。

好きな女性のタイプは特になし

小学4年生のときに親の都合で転校する

寒いとこに転校することが多かったのでそのためか寒さにはめっぽう強いが暑さに弱い。

中学3年の頃から貯めた貯金と小説を書いて投稿してそれがヒットして売り上げにより文月学園へ転校する。

機械音痴で、料理用の電子機器と携帯いがいで使える電子機器はすくない

本来なら学年主席に居てもおかしくないほどの頭脳の持ち主だが、気まぐれな性格と引っ越しの疲れがたまり居眠りをしてFクラスに配属された

ちなみに前にいた学校では50点満点の平均は48点。

最初のころはクールなふりをしているが　　本当は優しく気さくな振る舞いをする、誰にでもそうというわけではなく、信頼を置いている人物にはまた別の対応をする。

爺さん　父親、母親、の4人家族だが　一人で転校してきたため、一人暮らし。

大きな屋敷で1人暮らし　だが明久のマンションのとなりの部屋も借りている

学力、策力、身体能力全てにおいて秀でているが、明久レベルの鈍感がたまにあるかも

一人称はオレ。

自分が気に入らない物は容赦なく潰す。

基本的に自分から人を嫌悪することは少ない（格別迷惑な連中は別）。

常に木製のくないと短剣それと木刀を携帯している

いじめ対策で武器を持ち歩いてみたところ不良を圧倒。

刀剣類を持てば右にでる奴はいないと称された。

危険人物扱いもされた。

一度見たものを決して忘れない完全記憶能力を持つているが秘密にしている、高校から大学までの内容は全教科1年の3学期に終了させてている

裏設定

怪盗の家系で呪いがある美術品を盗んだりする
人格がもう一つあり髪が紫色になる翼も生える
この街に来た理由はいろいろある

召喚獣

赤のジャケットとか黒のジーンズを着ている 黒い外套をたまに着
ていることもある

両手に短剣か大剣を持っている 弓もたまに持っている

腕輪の能力は剣や弓に雷、炎、氷結などの属性をつける（攻撃力が
1.5倍から3倍まで上げることができる）

もう一人の精神の方で召喚すると

怪盗の姿で翼が生えている

翼が武器

プロローグ（前書き）

読んでいただければ幸いです

プロローグ

「吉井、遅刻だぞ」

吉井明久。文月学園一年所属、この学園ではじめての「観察処分者」である（要するにバカである）吉井明久はドスの聞いた声に呼び止められる。

声のした方には浅黒い肌に短髪のいかにもスポーツマンですみみたいな人が立っていた。

文月学園補習担当の西村宗一こと鉄人（鉄人こと西村先生）である。

「あ、鉄じ——じゃなくて西村先生。おはようござこます」

明久は軽く頭を下げて挨拶する。相手は生活指導の鬼だ。目をつけたられたらろくなことにならないのだ

「今、鉄人つて言わなかつたか？」

「ははつ。氣のせいですよ」

「ん、そうか？」

やばかつたな。危うく普通に「鉄人」と呼んでしまつところだった。鉄人つていうのは渾名だ。彼の趣味であるトライアスロンが原因である。真冬に半そでとかほかにも色々ありそうなんだけど

「それにしても普通に『おはようござこます』じゃないだろうが」「先生。先生は僕が挨拶せずに無視していたらどうするつもりでした？」

「補習室行きは確定だつたな」

「だつたら挨拶を重んじましょうよ」

「それとこれとは話が別だ」

「全くお前といつやつは・・・・・・遅刻の謝罪より先に挨拶の大

切さを説くとは・・・・・・いくら罰を与えても懲りないな」

「先生。僕、遅刻はあんまりしてないですよ? 遅刻の常習犯みたいに言わないでください」

西村先生は去年明久のクラスの担任だったので明久が遅刻の常習犯でないことは知っている。

「遅刻は、な。ほら、受け取れ」

鉄人が箱から封筒を取り出し明久に渡した。宛名の欄には『吉井明久』と書いてあつた。明久は一応頭を下げて受け取る。

「あ、どーもです」

「全く。転校生もしつかり来てるんだから、しつかりしろ」

「転校生?」

明久が首をかしげる。

「それにしてもどうしてこんな面倒なやり方でクラス編成を発表してるんですか? 掲示板とかで大きく張り出しちゃえればいいのに」

「うやつて皆に一枚一枚丁寧に封筒に入れて渡さなくともいいのに。」

「普通はそうするんだけどな。まあ、ウチは世界的にも注目される最先端システムを導入した試験校だからな。この変わったやり方もその一環つてわけだ」

「ふーん。そういうモンですかね」

適当に相槌しながら明久は封筒に手をかける。

さてコイツはどのクラスに入るのか
この文月学園はクラスがA～Fまである。一年生以上はAから順に
振り分け試験の成績順でクラスが決まっていくんだ。
頭いいやつはAだし、頭悪いやつはFだ。つまりは所属してゐるクラ
スで頭の良し悪しが丸分かり。だからコイツはFだけは避けたいん
だ。

「吉井、今だから言つがな」

「はい、なんですか？」

あの封筒つて糊付け頑丈なんだよな・・・・
苦戦してゐるぜ。明久のやつ・・・・

「俺はお前を去年一年見て『もしかすると、吉井はバカなんじゃな
いか?』なんて疑いを抱いてたんだ。」

「それは大いなる間違いですね。そんな誤解をしているよ!じや、
更に『節穴』なんて渾名をつけられちゃいますよ?」

明久は勉強しなかつたけど振り分け試験は良く出来たとか言つてた
気がする

「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気づい
たよ」

「そう言つてもらえると嬉しいです」

開かない・・・・・破つてあけよう・・・・
明久はDかCだろうかと思つたとか言つてた

「喜べ吉井。お前への疑いはなくなつた」

明久。冥福を祈らせてもらおうか・・・・・

『吉井明久・・・・・・Fクラス』

「お前は疑いようのない正真正銘のバカだ」

こつして俺たちの最低クラス生活が幕を開けた。

「…………なんだろう、このバカでかい教室は」

ノートパソコンに個人エアコン、冷蔵庫にリクライニングシート

「まるで高級ホテルじゃないか・・・・・まさかこれが噂のAク
ラスか・・・?」

明久がFクラスに向かおうとするとき（？）にAクラスのクラス代表っぽい人が見えた。

「…………霧島翔子です。よろしくお願ひします」

黒髪を伸ばした日本人形のような、何か神々しささえ感じさせるような人だった。

一年Fクラスの前。吉井明久は躊躇していた。

「遅刻なんてして、みんなの印象悪くなつてないかな・・・？」
「奴とか居たらどうしようつ・・・」

「なんて考えすぎだよね！」

そうこつてあいつは扉を開けて入つて

「すいません。ちょっと遅れちゃいました」

愛嬌たっぷりに言つて・・・・

「早く座れこのウジ虫野郎」

『無む』とされた。

「聞こえないのか？ああ？」

それにしてもなんて物言いだらけ。いくら教師でも失礼にもほどがある。

僕はにらみつけるように教壇に立っている教師を見た
その背は意外に高く、だいたい180cm強くらい。やや細身ではあるが華奢なわけではない。むしろボクサーのよう機能美を備えた細さを感じるぞこの教師

視線をもうちょっとと上にやると現れたのは意志の強そうな野性味たっぷりの顔をした教師（教師以下略）。
短い髪の毛がつんつんと立つていてまるでたてがみのよつに見える（もうどうでもいい）。

「…………雄一、何やつてんの？」

彼は明久の悪友、坂本雄一だ。教師じゃない。生徒だ。

「先生が遅れてるらしいから代わりに教壇に上がつてみた。なんか転校生がこのクラスに来るらしいぞ。」

「あ、そういえば鉄人も転校生がどうとか言つてた・・・」

『なに――――!? 転校生だとおおおお――!』

『男か!? 女か!?』

「残念ながら男だ」

坂本の死の宣告。

この一言で「クラスはずーーんと沈んだよつて。

「で、何で雄一が先生の代わりを?」

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？ それじゃ、雄一がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ」

明久はこのとき『雄一さえ説得すればこのクラスは僕の思いどおりに・・・・・』とか考えてたらしい。

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

考える」とは皆同じなんだな

でもってFクラスの面々はみんな床に座っている。決まってるさ椅子がない

「それにしてもさすがはFクラス。ひどい設備だね」

とつあえずあいている席でも探そうとおもった時、

不意に背後から霸氣のない声が聞こえてきた。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

そこには寝癖のついた髪によれよれのシャツを貪相に着た、いかにもさえない風体のオジサンが居た。

このクラスの担任だ。

「それと席についてもホーマルームれますか？ HRを始めますので」

明久と雄一がそれぞれ返事をして席に着く。

先生は明久たちを待つてから壇上でゆっくりと口を開いた。

「えー、おせよハヤコサす。一年F組担任の福原慎ふくはりしんです。よろしくお願ねがいします。」

福原先生は黒板に名前を書いていたとして、やめた。
チヨークすらまともにないみたいだな

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されますか？不備があれば
申し出てください」「せんせー、座布団に綿が入っていないです」「我慢してください」「せんせー、卓袱台の足が折れました」「ボンドで直してください」「せんせー、窓が割れて隙間風が寒いです」「ビニール袋とセロハンをあげますから直してください」
・・・・・ひじかわる。

「では、血口紹介でも始めましょうか。そうですね、転校生からや
つてもうらこめしょい」

『男だろ？ジーでもいい・・・・・』
『早く帰りたい』

めんどくせこなこんなクラスでやつていけるか

「では、風間勇斗くん、入ってきてください」

先生に呼ばれて、オレはEクラスの教室に入った

第壱話 バカとFクラスと自己紹介

「では、風間勇斗くん、入ってきてください」

先生に呼ばれて、オレはFクラスの教室に入つていった。

「風間勇斗くん。軽く自己紹介をしてください」

先生にそう促され、4人以外は聞いちゃいないだらうなとか思つたけど一応自己紹介をした。

「えっと、風間勇斗といいます

趣味は料理と読書、剣術とかが得意かな。1年間よろしくお願ひします」

さつと趣味と特技を言つたところでFクラスの面々が色々呟いている。

『けつこう可愛い顔してるな・・』

可愛いかオレ母親にだが言われたことはあつたがそういうわれると不快だ

「うぜえこというと消すぞ」

そういうつて殺氣を出す

静かになつた

その後

「しつもーーん」

一人が手を上げてきた。

「頭はどのくらい悪いですかー？」

「言いくらい質問だけでもいいか

「振り分け試験の時は一つの教科以外寝ていたからほとんどの点に近い」

この文月学園のテストは変わっている。

問題数無制限で、時間内なら一度に何点でも取れる。

極端にいえば時間さえあれば1万点でも取れる

「だけど前に居た学校では上の中ぐらいだ」

今度は皆が吐血した。

「えつとわうこう」となんによろしく

ほんとに最低クラスなんだと思つた

「では、自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願ひします」

先生に言われ廊下側の生徒が一人立ちあがり名前を告げる
「木下秀吉じや。演劇部に所属しておる」

しゃべり方がなんか違和感あるけど演劇部のなんかだろ。
男物の制服を着ているなんでだろう
次の人気が自己紹介を始める。

「…………土屋康太」

「特技は盜^vじゃなくて盜^vなんでもあります」

なんかあやしいやつだな

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です」

と思つて聞いてると女子の声だ。こんなむせこ奴ばっかじゃなくて良かつた。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は・・・・・」

ドイツからの帰国子女？

「趣味は吉井明久を殴ることです」

なんちゅー危ない奴だ！

吉井明久と思われるさつきの遅刻してた奴が喚いている。
きっと去年もあんな感じだったんだろうな。

吉井明久　たしか引っ越す前に仲良くなつたバカの吉井って
けどいいかきずかれなくて

あとはもう名前を言つてくだけか。
つまらないな。

明久まで順番が回つたようだな。

あこひの血「」紹介が終わつたら確認しねえと。

「——「ホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

「ダーリー、リン、イイイ——ン……！」

うわきもいキモ過ぎるよこのクラスあり得ないよ

「——失礼。忘れて下さご。とにかくよろしくお願ひ致します」

そのあとに教室に入ってきた

「あの、遅れて、すいま、せん・・・・・・
『え?』

クラスのほぼ全員が驚きの声を上げる。

そんな中、平然としてる数少ない人物、福原先生がその女子に話しかけた。

「丁度良かったです。今自己紹介をしてるところなので姫路さんもお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします・・・・・」

「小柄な身体を更にしおり込めるようにして声を上げる姫路さん。肌は新雪のように白く背中まで届く柔らかそうな髪は、優しげな彼女の性格を表していいようだ。保護欲をかきたてる可憐な容姿は、男

だらけのFクラスで異彩を放っている」

「落ち着け吉井。心の中のナレーションが表に出てしまつていてるぞ。それから無表情でそういう個人的な解析をすると変態に見えるからやめる。土屋。貴様はなぜカメラを用意している」

「…………写真を撮つて売る」

「へえそなんだ」

あとで消そう

それにしても姫路つて頭良くなかった

「はいっ！質問です！」

既に自己紹介も終わつてゐるどつでもいい男子A君が手を上げている。

「あ、は、はい。なんですか？」

「登校するなり、質問がいきなり自分に向けられて驚く姫路さん。

その小動物的な仕草が可愛かつたり」

「だから個人的な解析を口に出してするな。このバカ変態」

「なんだと！？僕のどこが変態なんだ！」

「全てだ」

「グハアー！」

明久が吐血していくばる。まあ静かになつていいや。

既に自己紹介も終わつてゐるどつでもいい男子A君が質問を以下略。

「なんでここにいるんですか？」

「…………失礼な奴だな。

『確かにそうだ。姫路さんは学年次席に匹敵するんじゃないのか？』

『どうしたことだ?』

『姫路さん結婚して』

だが姫路がなぜFクラスにいるのかはオレも気になつた。まさかオレじゃあるまいし居眠りなんて……。

「そ、その……」

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまって……」

ああ、納得。
確か振り分け試験は途中退席したら無得点扱いだったか。0点じやFクラス入りはむしろ必然とでも言つべきか。またFクラスのバカどもが騒ぎ出す。

『そういうばオレも熱(の問題)が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ? あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に会つたと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の嘘をありがとう』

『で、ではっ、一年間よろしくお願ひします!』

姫路は明久と短髪の不良っぽい奴の隣の空いている席に着く。

『え、緊張しましたあ……』

「あのや、姫」「姫路」「」

席に着くや否や、姫路は安堵の息をついて卓袱台に突つ伏す。

「は、はいっ。なんですか？えーっと・・・・・・・・

「坂本だ。坂本雄二。よろしくな」

「あ、姫路です。よろしくお願ひします」

「ところで、姫路。体調はいまだに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

振り分け試験の時は詳しくは知らないが、さつき本人が高熱出したって言ってたし気になるものは気になる。

「よ、吉井くん！？」

さつきから明久がなんかショック受けてる。

「姫路。明久がブサイクですまん」

坂本雄二が言う

「そ、そんな！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ・・・・・・

」

そしてその一言でショックを受けてた明久が手放しで喜ぶ。
なんて単純でバカなんだ・・・・・・

「そついえば確か明久に興味を持つてる奴がいたような・・・・・・

」

そんなのいるんだ。

「え？ それって誰」「そ、それって誰ですかー？」
「確か久保・・・・・・」

久保のその次は？

「・・・・・利光だつたか」

久保利光＝男
吉井明久＝男
結果＝B』

「・・・・・（明久が声を殺して泣く）」
明久つて男にもてるんだ

「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」
「心配するな、半分は『冗談だ』
「え？ 残りの半分は？」
「ところで姫路、体調はもう大丈夫なのか？」
「あ、はい。もう大丈夫です」

「そここの君たち。少し静かにしてください」

と先生に注意されたところで、

バキバキガラガラ・・・・・・

先生の教卓は無残にも「ゴミ」になってしまった。

たすがFクラス。酷いわ。

「えへ、替えを用意してくれるのドリード血盟でもしててトセー」とこつて先生も出て行つてしまひ。

ホントになにから今まで最低クラスなんだ・・・・

「雄一、ちょっとこー?」

「ん? なんだ」

「ソレじゃ話しこくから廊下で」

「・・・・・分かつた」

やつこいつと一人は立ち上がつて廊下に出て行つた。

となりの席の秀吉に挨拶をする

「木下だつたな」

「やつじやが

「やつじやな 一つだけ質問があるナビにいか

「なんじや」

「何でお前男子用の制服着てこるんだ」

「お前もわしを女子としてみるのか
えつなんでそんな反応なのだろ?」

「わしは男じゃ――――――」

「それはすまん」

「まあわかつてくれたらいいのじゃ」

第3話

バカテスト 化学

第1問

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例をひとつ挙げなさい。』

姫路瑞希と風間勇斗の答え

『問題点・・・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点
合金の例・・・・・ジヒラルニン』

教師のコメント

正解です。『金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのです
が、姫路さんと風間君は引っかかりませんでしたね

土屋康太の答え

『問題点・・・・・ガス代を払つていなかつたこと』

教師のコメント

そこには問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・・・未来合金（すいごく強い）』

教師のコメント

すごく強いといわれても。

明久 side

「それで、話つてなんだ？」
「この教室なんだけど・・・・・」
「ああ、ひでえもんだな」
「何とかできないかな」

さすがにHR中だから人影はないし、これなら安心して雄二と話が
出来る。

「教室の設備をなんとか・・・・・ねえ・・・・・」

「うん。こんな風に汚れてたんじや、勉強だつてままならないし、
何よりみんなの身体に害が出る・・・・だから、もつといい設備
を手に入れて、皆が安心して学園生活を遅れるように・・・・・
「つまりお前は体調の悪い姫路のために教室の設備をもっと良くし
たいわけだ」

うぐううー。さすがかつて“神童”と呼ばれただけのことはあるなー。
勘だけはいい奴だ！

「恥ずかしいから遠まわしに言つてゐるのにストレートに言つて直さないでよー！」

なんだかものすごい恥ずかしい。Fクラスの人たちに聞かれたら殺されそうだな（特に須川とか）。

Fクラスには女子といい感じになつた男子（審問するやつら曰く異端者）を審問する（ただの逆恨み＆妬み＆ハツ当たりなのが）集団がある。

『異端審問会・FFF団』

Fクラスの須川亮をはじめ、Fクラスの男子（雄一＆秀吉＆風間以外）全員が所属している。明久もある。

もてない男の集まつた逆恨み集団以外の何者でもない。ちなみに同じ異端審問会に所属している男子でも審問されることがある。

たいていは理不尽な理由で殺され……もとい、審問及び処刑される。

「いいだろ？ どうせ俺も、やる気でいたんだからな

「え・・・・・・？」

「明久がやる気ならなおい。俺も最初からやひつと思つてたんだからな

「・・・・・・・・・・雄一。なにを企んでるの？」

僕は雄一に疑いの目を向ける。

コイツは僕の幸せと幸福と笑顔を何よりも嫌つてゐる。

「イツが何か企んでいるということは僕の死亡フラグが確立への一歩を踏み出すということだ。

「ちがうわ。バカ。俺はただ、世の中テストの点数や学力だけが全てじゃねえってことを証明してみたくなつただけなんだ」

「……………ごめん雄二。疑つて悪かつたよ」

「気にするな明久」

「うん！やろう！」

『試験召喚戦争』を…！

この文月学園は『試験召喚システム』を取り入れている。

生徒は最後に受けたテストの点数にあわせた攻撃力を持つ召喚獣を教師承認の元、召喚して戦わせることが出来る。

このシステムを利用したのが試験召喚戦争である。

二つのクラスが召喚獣を用いて戦争をし、先にクラス代表を討ち取られたクラスが負けとなる。

勝ったクラスは相手のクラスの設備と自分のクラスの設備を交換出来る。

下位勢力が負けると設備がランクダウンする。

「そつなつたら、皆に報告しねえとな……つと先生が戻ってきた。教室に入るぞ。明久」

「うん！」

てな訳で、新しい教卓（ボロさはさつきと変わらない。さすがFクラスだ。替えまでボロいのか）を持ってきた先生と一緒に教室に入った。

「ではクラス代表の坂本君。君が最後です。自己紹介してください」「はいはい」と

雄一が先生に言われて前に出る。

「俺はクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは坂本でも代表でも好きなように呼んでくれ」

「じゃあ皆。早速だがクラス代表として提案がある。聞いてくれ

「皆。このクラスの設備に……不満はないか

？」

雄一が間をおいて言つ。

その台詞に皆は・・・・・

「…………大ありじやあああ——————」

「…………」

「そこで俺はクラス代表として提案する」

「皆が『ぐくつと息を飲み・・・・・・・・

「俺たちはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けよつと思つ

『勝てる訳ないって』

『これ以上設備が酷くなるのは嫌だああ！！！』

『姫路さんという天使がいたら何も入らない』

みんなが喚きだす。

普通、最下位クラスのFクラスが最上位クラスであるAクラスに勝てる訳がないからだ。

「まあ皆落ち着け。勝算はある」

「――――――――――？」

「例えば土屋康太！」

みんなの視線が彼に集まる。

「おい。ムツツリーー。いつまでも姫路のスカート覗いてないで早く前に来い」

「こいつがあの寡黙なる性識者だ」

「――――――――――」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（ぶんぶん）」

もう否定しても遅いよ。ムツツリーー。

顔に畳の後が

『こいつがあのムツツリーーだと！？』

『本當か！？はじめて見た！』

『あいつ、畠に顔をつけてたあとを消そうとしてるぞ！？確かにムツツリーーだの名に恥じないムツツリスケベだ！』

ムツツリーー＝ムツツリスケベなだけなんだけど、これは結構有名な話。

勇斗 side

ムツツリーーってなんだニックネームか
ムツツリーーだからムツツリスケベとかまさかなかなわない。それから木下秀吉！

「ハイツの保健体育の実力はAクラス以上のものだ。恐らく誰もへえそなんだ木下の特技は何かな

「演劇で秀吉を上回るものはいない」
演劇かよまあ特技と言つてはいいことだらう

坂本の説明に皆も納得している。

『木下秀吉つて、確か演劇部のホープだらう』

『確かにAクラスに双子の姉がいるつて・・・・』

『なら何かしらやつてくれそうだ！』

「さうにこのクラスには姫路もいる。主戦力にして切り札だ」

みんなの視線が姫路さんに集まつた

『姫路さんつて実力は学年次席レベルなんだろ？』

『最強の切り札じゃないか！』

「当然、俺も全力を尽くす」

『それじゃあこのクラスにはAクラス並みの実力を持つ奴が2人もいるのか?』

この一言が火種で・・・・・

『勝てるんじゃないか!?』

卷之三

Fクラスは一気にヒートアップした。

「それにこの吉井明久もいる」

— — — — — ? ? ? ? ?

『だれだそれつて？』

「コイツは学園はじまつて以来、最初の『観察処分者』だ！」

え、えっと雑用係じゃなかつたつかけそれ

「あの、それってすごいんですね？」

姫路さんが手を上げて質問する。

「ああ、すゞいぞ。誰でもなれるわけじゃない。勉強する気なし、生活態度も悪い、問題児に送られる称号で、ちなみに先生の雑用係だ」

「雑用係ですか?」

「ああ。観察処分者の召喚獣は普通と違つて物理干渉が出来る。教師の雑用を召喚獣を使って手伝うためだ」

「それって本当にすゞいんですね!」

「実際教師の承認がないと呼び出せないのは一緒だし、召喚獣の痛みや疲労は何割かがこのバカにフィードバックしてくるから、実際はほとんど意味がないがな」

「大丈夫だ。恐らくコイツはそつ簡単には召喚獣を呼び出さないだろ。攻撃されたら痛いからな」「なるほど」

へえそりなんだ

『じゃあ、そつ簡単に召喚できない奴がいるのか!?』

『でも吉井つてバカだからいなくともいいだろ』

『それもそりだな』

「だがこれではAクラスには勝てない」

「「「「「「オイ!..」」」」」

「だから手始めにロクラスを落とす。うまく」とを運べば、Aクラ

スにも負けないからな

「「「「「なるほど」「」「」「」「」

「ひねりいいな

「といつてでバカ（あきひや）ヒロクラスに宣戦布告に行つてもうう」

「えー やだよ」

下位勢力の宣戦布告の使者はたいていボコされる。

「行かなきや俺がお前をボコす」

「行つてきます！！」

僕はダッシュでロクラスまで宣戦布告に行き、ボコボコにされて帰つてきた。

その間に坂本はなにやらカツコいい台詞を吐きまくつてたのである。

「全員筆を執れ！！出陣の準備だ！！」

『おお――――――――』

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！システムデスクだ！！」

『おお――――――――』

HRが終わり

「木下も大変だな」

「秀吉で呼んでくれわしも勇斗と呼ぶから

「ああ、分かつた」

「それにしてもこのクラスステンションが高い奴多い気がする」

「そうじやな」

「秀吉の今田部活あるのか なかつたら一緒に帰れいわいわい」

「ちょっとのじや」

「うか

「じやあ行こつか」

やつこつて一緒に帰る

第参話

帰り道

歩いてこるなんとなく口に出してみた

「秀吉」

「なんじや 勇斗」

「なんとなくだ」

「そうか」

なんか話す話題がないので本を出してみる

「勇斗何を出したんじや」

「ただの本だけど」

「どんな名前なんじや」

「えっと〇〇～～って名前の本だ」

「話題の大ヒット作の小説じやな

「それの6巻だ」

「6巻じゃとたしか1部だけしか発行されていた幻の」

「ただけだ」

「どうやって手に入れたのじゃ」

「内緒だ」
自分が作者だからって言えない

「秀吉の本欲しいのか」

「別にわしが欲しいわけではないが姉上が読みたいと書いておったのじゃ」

「だったら明日渡しに行くから伝えておいてくれ」

「わかったのじゃ」

やつして途中で別れる

Dクラス戦田の朝。

本を渡しにいかんといけないな

オレ「昨日のこと秀吉の姉に話したか
秀吉「つむ喜んでおつたぞ」
オレ「やつか回復試験受けたら行くか」

Dクラス戦が始まる

明久 side

「吉井！木下たちが渡り廊下でDクラスと交戦状態に入ったわ！」

Dクラスは新校舎の端、Fクラスは旧校舎。

この二つの教室間はかなり距離があるから、戦力も分散しやすい。それをねらつての時間稼ぎだった。

「何が足りないんだろうな・・・」

こいつしてみると、同じ部隊に配属された島田さんは、いわゆるモル体型で、背も高いし、脚も綺麗なんだけど、どうしても何か物足りなさを感じてしまう。

「ああ、胸か・・・・」

と自問自答がポロリと口から出てしまつ。

「アンタの指折るわ。小指から順番に全部綺麗にへし折るわ

まずい。田が本気になつてゐる。

「まあまあ島田さん。今は試合戦争に集中しようよ
・・・・・まあ、そうね」

危なかつた！危うく僕の十本の指が揃いも揃つて変な方向を向くといひだつた・・・・！！

「今戦況はどうなつてゐるのかな・・・・・・」

「木下たち先攻部隊が頑張ってくれてるのよ」

そこへ、叫び声が聞こえてきた。

『戦死者は補習室へ集合――――――――!』

「 錆人 ! 」 鬼の補習は嫌だ !!

『あらはの「機密」）を：考略：』

『助けてくれー！』

『これは立派な教育

『これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎という、模範的な生徒にしてやるから安心しろ!』
『安心できね————!』

Dクラスの人が3人、Fクラスからも4人、補習室送りが出た。だがおかげで雰囲気はなんとなく分かった。この状況で僕らがするべきは、ただ一つ！

「畠山さん。中堅部隊全員に通達」

卷之三

「バカ！！！」

（ホリエント）殿/ハナ。

普通そこはグーとかパーとかじゃないの！？

一
二
三
四
五

「田舎者」の本

「アンタは部隊長でしょー！臆病風に吹かれちゃダメでしょー！」

「君の言つ覚ます田が焼けるよつに痛いんだけビオオオオオオオオ
オオ！－！」

島田さんが僕の襟首をつかみあげる。

「ウチ等は木下たちが点数を補給してゐる間、木下たちの代わりに戦わなきやなんないの！－ウチ等が逃げたら木下たちが点数の補充にいけないでしょ！－」

なんか島田さんがすゞしく良いこと言つてゐる気がする。
すごい。島田さんの言葉に涙（と激痛）が止まらないよ（注・明久は痛みに泣いてゐるだけである）。

「島田さん。僕は君の男らしさに感動したよ。僕が間違つてた。鬼の補習なんか恐れずにこの戦争に勝利することだけを考えて動けばいいんだ！！」

「ウチは女よ」

「さあいこつ！勝利を田指すんだ！」

島田さんの視線が怖いが気にしなによつてよつ。

と勝利を田指して意氣込んでる所へ報告係がやつてきた。

「報告します！先攻部隊、負傷者、戦死者ともに多数。撤退を開始しました！」

「よし！僕等の出番だ！」

「まつて吉井」

島田さんに止められた。

「総員退避よ」

「さつきといつてることが真逆だよ！？」

「私たちは十分頑張った。もうこれ以上は無理なのよーー。」

まだ何もやつてないけどね。

しかもなんか戻っちゃいけない気がする。

「そうだね。僕等には荷が重すぎた。撤退しよう

「了解」

一人して臆病風に吹かれた。

そこへ、隠密（暗殺）担当のムツツリー一がやつてきた。

「……………明久

「どうしたの？ムツツリー一

「……………雄一が、逃げずに戦つたら

これをやると

「これは…………

ひ、秀吉の着替え写真！！

「……………逃げたらこれを明久の家に

100枚送りつけるとも

「一、これは…………

て、鉄人の入浴写真！！？

どうやって撮ったんだ！？この写真！！

こんなの送りつけられたらたまたもんじゃない！

「全員突撃——————！」

「え！？撤退は！？」

島田さん驚く。

「みんな攻めるぞーーー！出ないと、鉄人の入浴写真が家に送りつけられてしまうーーー！」

卷二

僕等の脳破壊を防ぐためにも、この戦争に勝利しなければ！
ここで前方から撤退してくる美少女を発見。

「明久！今おぬし、美少女と書いて秀吉と呼んだだろ？」「そんなことより、ここは僕等に任せて早く回復試験を受けてきて

「うむ、かたじけない！！」

秀吉が教室に急いでいく。

あとに続く選考部隊の人数が少なくなっている。
大分戦力を削られたのだろう。

「吉井！試験召喚戦争のルールは覚えてる！？立会いの先生がいいないと召喚獣を呼び出せないんだからね！」

「わかつてん！！」

試験召喚戦争には細かいルールや規約がいっぱいある。

1、原則としてクラス対抗戦である。各科目担当教師の立会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。なお、総合科目勝負は学年主任の立会いの下でのみ可能。

2、召喚獣は各人一体のみ所有。この召喚獣は該当科目において最も近い時期に受けた点数に比例した力を持つ。総合科目においては各科目最新の点数の和がこれに当たる。

3、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減点され、戦死に至ると0点となりその戦争を行っている間は補習室において補習を受講する義務を負う。

4、召喚獣は止めを刺されて戦死しない限りはテストを受けなおすて点数を補充することで何度も回復可能である。

5、相手が召喚獣を呼び出したにもかかわらず、召喚を行わなかった場合は戦闘放棄と見なし、戦死者同様に戦争終了まで補習を受ける。

6、召喚可能範囲は担当教師の半径10メートル程度（個人差アリ）

7、戦闘は召喚獣同士で行うこと。召喚者自身の戦闘参加は反則行為として処罰の対象となる。

8、戦争の勝敗はクラス代表の敗北を持つてのみ決定される。この勝敗に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。あくまでもテストを用いた『戦争』であるという点を常に意識すること。

要約するとこんな感じ。

ちよくちよく改定されたりはするけど、この認識でいいはずだ。

よく覚えておかないと、『テストを用いていれば、召喚獣なしでも

勝負が出来る』なんてことには気づかない。

「吉井！見て！」

島田さんの指差すほうを見る。

「五十嵐先生に布施先生！？Dクラスのやつ等、化学で勝負を挑んでくるつもりだな！？」

化学自身ないんだよな・・・・・・

「学年主任だと総合科目になつて時間がかかるから立会人を増やして一気に来るつもりなのね！」

「島田さん、化学どれくらい！？」

「60点台が普通よ」

さすがFクラス。ひどいなあ。僕が言えることでもないんだけど。

「ならあそこは避けて学年主任の高橋先生のところに行くのがいいな」

「了解！」

で、僕等はこそこそと隅へ移動する。

・・・・・あまりほめられた光景じゃないような・・・・・・

「美波お姉さまー見つけましたわ！」

「げ、美春！？」

「しまつた！布施先生が来るー！」

こじで一人で戦つてたら点数を消費してしまう！

仕方ない！

「島田さん！」は趙に任せて僕は先に行く！」

「え！？普通逆でしょ！？」

「そんな台詞、僕は知らない！」

「えええ！？」

島田さんが快く（？）引き受けてくれた！
先を急ぐぞ！

「吉井！あとで殺してやる！」

なんか物騒な」と言つてゐる！

「仕方ないわね！勝負よ美春！」

「お姉さまー美春の愛の一撃、受け止めてくださいーーー！」

Dクラスの清水さんと、島田さんの戦闘が始まる。

「「試験召喚！」」

第肆話

バカテスト 国語

第一問

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『（2）悪いことがあつた上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『（1）弘法にも筆の誤り』
- 『（2）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴つたり』や『弱り田に鼎り田』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『（2）泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

明久SIDE

「「試験召喚…！」」

Dクラスの清水美春さんと島田さんが同時に叫んだ。と同時に足元になんか魔方陣っぽいものが出てくる。これが教師の立会の下、試験召喚システムが起動した合図で、魔方陣の真ん中には所属するクラスが書いてある。

ポン！

そして召喚獣が姿を現す。

軍服にサーベルのその召喚獣は、顔つきや髪型がそのままで、身体だけ小さくなつた『デフォルメされた島田さん』のよつた感じ。相手の召喚獣も『デフォルメされた感じの奴で、あつちは普通の剣みたいだけど。

「お姉さま！美春の愛の一撃、受け止めてくださいーー」「ウチは普通に男の子が好きなのーー！」

「さういふ激戦の真つ只中で繰り広げた会話としてはあまりにも不適切な気がする。

「男なんて豚同等の家畜ですよー? お姉さまはそんなものに近づいてはいけません!!」

「此處」乃是一大山脈

不適切極まりなさすぎる。

V
S

Dクラス
清水美春
化学
94点

「島田さんサバ読んでたの！？60点書いてないじゃん！」
「数学以外じゃ無理ーーー！」

わいざ島田さん！鬼の補習に生き残れたらまた会おう！
島田さんを潔く見捨てる！これも戦争なんだ！

「まあお姉ちゃん一緒に保健室のベッドであんなことやるんな」と
を・・・・・「

島田さん。『メン。僕じゃ・・・・・

「オネエサマの邪魔をスルモノ・・・・・・キリ（ＫＩＬＬ）マス・・・・・・」

そこに行く勇気はない！

「ちょ、吉井！」

「やめさせ田さん」

「アンタ、ウチを見捨てる気！？」

単語は物語は、物語

とそこへ須川君がやつてきて・・・・・

「島田！助太刀するぞ！！」

Fクラス 須川亮 化学 76点

VS

Dクラス 清水美春 化学 41点

須川君の召喚獣が清水さんの召喚獣を破る。いわゆる戦死という状態だ。

「え？ あ、あれ？」

突然やつてきた須川君にあつと言つ間にやられてしまつた清水さん。島田さんとの戦いで点数をかなり消費してたから、簡単に負けちゃつたんだね。

「〇点になつた戦死者は、補習――――――！」

清水さんが補習室に連行される。

「お姉さまー美春は諦めませんからねー美春の愛は鬼の補習程度では止められませんからー」

むしろ止めておいて欲しい。

とっても危険な香りのする捨て台詞を残して清水さんが鉄人に連れて行かれた。

「吉井」

「島田さん。お疲れ。化学の点数を補充してきなよ

「吉井」

「さ、須川君。他にも助けを求めてる人がいるだろ? だから行こう!」

「吉井」

「…………はい」

「…………ウチを見捨てたわね」

「…………記憶にございません」

戦争と云うだけはあるなー。殺気が(島田さんから)ひしひしと僕に伝わってくる。

「…………」

すごく居心地の悪い沈黙が続く…………

「死ね! 吉井! 試験召^{サモ}——」

「誰か! 島田さんが錯乱したぞ! 本部に連行してくれ!」

「落ち着け島田! 吉井は味方だ!」

すごく殺気に満ちた目で僕を見ないで島田さん!

「違うわー! ゴイツは敵! ウチの最大の敵なのー!」

否定する要素がない…………

「須川君。口口」

「了解」

「放しなさい須川! あいつだけは…………あいつだけは——

——」

身の確保だけは出来たな。

「よしー!秀吉たちの補給が終わるまで」*」*は誰も通さないぞー。」

大声で指示を出す。

「前線を突破出来れば、補給中の奴ばかりだ!」*」*クラスなんかに負けるな!!」

向こうの隊長格からも大声で指示が飛ぶ。

ここからが正念場だ!

勇斗 side

教室で回復試験の真っ最中。

にがてじゃないか得意ともいえない

「先生!回復試験を受けさせて欲しいのじゃー。」

「秀吉ー!」

ドアを開けて秀吉が入ってきた。

「科目は何にしますか?」

「化学でお願いしたい!」

「では準備がよければ始めてください」

「（秀吉。戦況はどんな感じだ？）」

「（あまり好ましくないのう。化学の布施先生と五十嵐先生が出てきて苦戦しておる。）」

「（化学か・・・・・・）」

丁度今受けている試験も化学だ。

「や！」まで一姫路さんと風間君は引き続き数学のテストを・・・・・

「先生。オレ数学のテスト辞退します」

「え？」

秀吉と姫路さんが驚く

坂本にはいつてなかつたけど数学だけ振り分け試験でやつた教科なんだよな

姫路「でも、坂本君の指示では数学も受けたほうが多いって・・・・・

オレ「その教科は点数あるから大丈夫だ」

秀吉「前に1教科だけうけておつたとか言つておつたな」

オレ「じゃあ本を届けるついでに行つてくる」

明久SIDE

「クソーもう持たないかも・・・・・・！」

『吉井隊長！横溝が戦死！布施先生側があと一人に！』

『五十嵐先生側があとオレだけだ！援軍頼む！』

『藤堂が戦死しそうだ！何とかしてくれ！』

劣勢は想像以上だ。

雄二たちにも応援を頼みたいけどそんなことしたら作戦に使う戦力がなくなる・・・・

「布施先生側は防御に専念して！五十嵐先生側は総合科目担当と入れ替わって効率いい勝負をするように！藤堂君はかわいそうだけど見捨てよう！」

『了解！』

「Fクラスのやつ等、時間稼ぎ目的か！？」

「何を待ってるんだ！？」

「あつちは世界史の田中が来たぞ！」

「世界史の田中だと！？」

「長期戦目的か・・・・！」

まずい。Dクラスの人たちが、こっちの作戦に気づいてる。
姫路さん！まだなの！？

『布施先生側に戦力を集中させろ！五十嵐先生はオレが行く！』

この声は・・・・

「風間君！よかつた！間に合った！」

「数学のテストはやめてきたからな」

「え？やらなかつたの？」

「点数はあるからな。たまたま受けてたテストが化学で、Fクラス

が化学で押されてるって聞いたからな。五十嵐先生側のD連中は任せろ！」

「分かつた！頼むよ風間！」

「わかつた！」

風間SIDE

「クツソー・・・・・・」

「援軍はまだなのか！」

「こっち側はあと二人か。
相当追い詰められてんな。

「援軍だ」

「おお！風間！すまないが頼む

「任せておけ」

「Fクラス風間勇斗、この場にいるDクラス全員に化学で勝負を申し込む！」

「な、何！？」

「Dクラス全員にーーー？」

「Dをなめてるでしょーーー？Fの癖にーーーーー！」

「御託はいいからかかってこいよ。早く戦いたくてうずうずしてんだ

だ

「舐めないでよね。行くわよ皆ー！」

向こうのリーダー格の女子が先陣を切つてくる。

「…………試獣召喚！――」

「試獣召喚！――」

Fクラス 風間勇斗 化学 ???点

VS

Dクラス	岡本辰美	化学	112点
	今井さやか	化学	100点
上坂由美	化学	120点	
碇由香	化学	93点	

俺の召喚獣は黒い外套を着ていた手には短剣

「Fクラス風情がDクラスをなめるんじゃないわよ」

そいつて俺の召喚獣に襲つてきただが

「オレをなめんな」

Fクラス 風間勇斗 化学 ?39点

VS

Dクラス	岡本辰美	化学	0点
今井さやか	化学	0点	

上坂由美 化学 0点

相手はなにが起こったかわからない
「俺の勝ちだな」

「戦死者は補習室に集合！！」

「げ、鉄人！」

「ほしゆうあだ~~~~~!!」

そしてロケラスの奴が連行された

Fクラスの奴に

「お前らオレが攻めると坂本に伝えておけ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3516y/>

バカとテストと転校生！

2011年11月21日16時31分発行